

リベラル・ナショナリズムの罨

鶴見 太郎

ここ十数年のナショナリズムに関する報道や研究の隆盛は、社会科学において、一時期のナショナリズム幻想論を経て、思想分野においてさえ、ナショナリズムに一定の「市民権」を与えようという流れを帰結している。本稿で取り上げるうちの1著が、出版から12年経てから日本語訳された背景には、こうした判断が関係しているものと推測する。もちろん、ナショナリズムのある部分を称揚する議論は社会科学には以前から存在していた。例えば、Kohn[1944]は、ナショナリズムを西欧の市民的なそれとそれ以外の地域のエスニックなそれに分類し、後者を否定した上で前者を称賛した。これに対して、近年のリベラル・ナショナリズムという議論は、フランス革命型の市民的ナショナリズムにもナショナルな価値を抑圧するという非リベラルな態度があることを指摘し、(エスニック・)ナショナリズムにも傾聴すべき主張があり、ナショナリズムの限界を認めつつもそれとうまく付き合っていくことこそがリベラルであるという主張である。本稿で取り上げる2著——Yael Tamir, *Liberal Nationalism*(1993:日本語訳2006年)、Ray Taras, *Liberal and Illiberal Nationalisms*(2002)——は、そうした流れの上に立ち、かつ書名に「リベラル・ナショナリズム」を擁するものである。

2007年夏現在イスラエルのオルメルト政権下で教育相を勤めるヤエル・タミールが、テルアビブ大学の講師時代に出した*Liberal Nationalism*

は、リベラリズムとナショナリズムを折衷させようという規範論からの試みである^①。ナショナルな価値を重視するという意味で、エスニックな単位を重視するコミュニタリアニズムに論理構造は類似しており、そのナショナリズム版であるとも言えよう。ネーション概念の中心に文化を置く点も一致している(コミュニタリアンと若干異なるのは、ネーションへの帰属の個人の選択可能性を強調している点である)。

はじめに、本書が提示する、コミュニタリアンの議論よりもさらに踏み込んだ、既存の国民国家にとっての重要な論点、すなわち、最後の2つの章の中心に位置する福祉国家に関する議論について見てみたい。「自由な制度は異なる民族から成り立っている国においてはほとんど不可能である」というJ・S・ミルの言葉を引きながら、タミールは近代の国家概念がリベラル概念とナショナル概念の両方に基盤を置くことで成り立ってきたことを確認する。そして、国家の役割を極限まで制限したとしても、最も概括的な原則でさえ、何が公平で何が効率的かという観念の反映であるため、いかなる国家もナショナルなものに関して真に中立的であることはありえず(「中立性の幻想」)、そうである以上は、必然的にマイノリティに不利を強いることになるという原理的問題を指摘する。この指摘に集約されていることは、タミールが単にリベラル・ナショナリズムを提唱するというよりも、既存のリベラリストの大半がネーション概念を前提としており、したがってすでにリベラル・

ナショナリストであるという事実である(Tamir [1993: 139-140, 144-6])。こうして、リベラリストがナショナリズムなるものに言葉の上では懐疑的であることは裏腹に、現実的にリベラリズムがナショナリズムを前提としていることに自覚を促しているところに本書の一番の意義があるように思われる⁴⁾。このことから示唆されるのは、一見ナショナルなものに中立的に見える国家においても、マジョリティは何らかのナショナルな権利をすでに擁護されていることに自覚的であるべきだということである。例えば、自らのある特殊性を中立的なものとして他者にそれを無自覚のうちに押し付けるといった事態は、自覚的なナショナリストがおそらく少ない日本においてもよく見られることであり、ナショナリズムを無条件に忌避してしまうことは、こうした事態の可能性に思い至るための思考さえ停止してしまいかねない。

しかし、結論としてナショナルなものにより注意を払う世界秩序を構想するタミールの議論には、次のような本質的な問題がある。第1に、彼女がナショナリズムを文化的な権利としてのみ捉えていることである。この点は、集合的単位を文化・道徳共同体として捉える多文化主義やコミュニタリアニズムと同じであるが、ナショナリズムの場合では、その原動力が日常的な経済的問題や安全保障の問題など、文化的・道徳的共同性への希求とは異なる次元であることが少なくない。この点は、今日まで様々な議論されてきた、ナショナリズムが何によって突き動かされているかという問題に絡むものであるが、ナショナリズムを一様に文化の問題としてしまうことは、少なからぬナショナリズムを捉えそこなう(擁護にもならない)危険性がある。タミールはイスラエルのユダヤ人のナショナリティが尊重されるのと同じように、イスラエル国内も含めて、パレスチナ人のナショナリティ

が尊重されるべきであると繰り返し述べているが、そもそも「パレスチナ人」という範疇はシオニズムを侵略と捉える中から出来上がった範疇であり、文化的共同性の希求はその始まりから現在に至るまで中心的な問題ではない。

2つ目の問題は、ナショナリストの自己正当化にとってより本質的である。タミールは、コミュニタリアンであるM・ウォルツァー(『』内)を引きながら次のように述べている。「ナショナリズムは、階梯や秩序についての通約不可能性の理論や単なる不可知論と完全に両立するものである。『自らのコミットメントと同じ他の人々のコミットメントに敬意を払い、尊重する点において、また、エゴイストと異なり、他者を競争相手や敵対者として見ることをしにそうできるという点において、ナショナリストはむしろパトリオットに近い』」(Tamir[1993: 94])。この点において、タミールのナショナリズム観は、「ナショナリズムはネイションのイデオロギーであって、国家のイデオロギーではない」とするA・D・スミスが挙げるナショナリズムの中心的教義の第1番目と重なる。「世界は、各々が独自の個性、歴史、運命をもつネイションにわけられる」(Smith [1991=1998: 136])。スミスがそうしたように、タミールもこの点こそ(リベラル・)ナショナリズムと、範疇間の階梯づけを行うナチズムや人種主義を分ける点であるとしている(特に第4章)。彼女が前提としているのは、文化的に定義しうるネーションが世界中に多数存在し、しかも世界はそうしたネーションが基礎単位となって構成されるということである。

だが、この論理には、多文化主義と同じ欠陥がある。大澤真幸によれば、多文化主義の論理は「任意の文化は尊重されなくてはならない。それゆえに、この特定の文化——われわれの文化——も尊重されなくてはならない」というものである。しかし、任意の文化が調和的に共存

しうる平坦な平面が存在するという確信はこの論理の後半（「この特定の文化…」）によって支えられている、と大澤は指摘する（大澤 [2007: 611]）。これと同様に、リベラル・ナショナリズムの道徳的確信の源泉は、ネーションが基礎単位となった世界秩序（「平坦な平面」）を大前提とした上で、自らは積極的にこの世界秩序そのものや他のネーションを尊重するのだから、自らのネーションも尊重されて然るべきであるという確信である（したがって、論理構造としては、個人が基礎単位となった世界において、他の個人を尊重する代わりに自らも尊重されるべきであるというリベラリストの確信と同じであり、その意味で「リベラル・ナショナリズム」なのである）。しかし、敷衍すれば、このことは、他者をネーションとしてのみ尊重することであり、どの範囲を1つのネーションとしてカウントするかという問題がつきまとうだけでなく、他者をネーションという「フィルター」を通してしか認知しないということの意味する。例えば、「パレスチナ人」という範疇が今日のようにイスラエルでも自明視されるようになる以前において、シオニストはパレスチナ地域の非ユダヤ住民を「アラブ人」として認知することにより、「アラブ人」はマグレブからイラクに至るまでの「広大な土地」を持っており、その極僅かな一部に過ぎないパレスチナが、世界のナショナルな再編の流れの中で、その土地にナショナル・アイデンティティの源泉を持ち、かつ存続の危機にあるユダヤ人に配分されることは不自然なことではないはずだ、として自らのナショナリズム（シオニズム）の道徳的確信を得ていた側面は小さくない⁹⁾。このパレスチナの住民がイスラエルにおいても「パレスチナ人」として認知されるようになったのはここ数十年のことであるが、あくまでも西岸とガザがパレスチナ国家となった暁の潜在的国民という意味においてである（イスラエル国内のア

ラブ系住民は単に「アラブ人」とされることが多い）。そして、いずれの場合でも、一人のアラブ系住民は何らかのネーションの一員として一括して扱われ、それ以外にシオニストとのチャンネルはないことになるが、少なくとも発端においてこの構図はシオニストの一方的な自己了解の域を超えていなかった。

さらに、そもそもネーション概念と本質的に相容れない集合性をタミールは考慮していない。例えば、旧ソ連地域のコサックについて考えてみたい。コサックはロシア帝国時代に帝国の版図を拡大する上で重要な役割を担った半農武装集団であり、ソ連時代の抑圧を経て今日コサックの復興運動が見られる。コサックの定義はコサックを自称する者の間でも多様であるが、エスニック集団として内外で捉えられることは少なくなく、コサック自身が緩やかながらいわゆるロシア人とは異なる血縁集団として自らを定義している（ただし、理念を共有する限りにおいて誰でも「入隊」可能ともされる）。しかし、コサックの中心的な自己定義には、「ロシア国家を守衛する者」というものがある（反ユダヤ的な歴史や北方領土やチェチェンに対する強硬姿勢もここから来る）（Skinner [1994], 植田 [2000]）。つまり、ロシア人であると同時にコサックである（「ロシア人」の下位概念である）、という単純なものではなく、コサックの定義の中心に、抽象的であるにせよ「ロシア」が入っているのである。逆に、こうしたコサックを取り込んでいる他のロシア人という存在も、コサックなしには軍事的に不完全なものとなる（両者は概念的に相互依存関係にある）。つまり、これらはタミールの想定する自律的な単位であるネーションの機能的等価物となっていないのである。社会科学が、タミールとは多少なりとも異なるにしても自律した単位としてのネーション（ないしエスニック集団）概念で世界を認識するようになって久しいが、

それはあくまでも一つの認識方法に過ぎないのであって、その認識枠で世界を切っていく態度は決してリベラルではない。結局、数あるネーション定義のいずれにも当てはまりやすい集合体とそうでない集合体との格差が発生し、にもかかわらず、この認識枠はそれを認識する契機を備えていないから、後者からの異議申し立てを反リベラルなナショナリズムとして処理することになるだろう。

2冊目の、米国テューレーン大学教授（東欧政治史）レイ・タラスによる書は、民主主義ないし市民的ナショナリズムを、地域特性を無視して非西洋諸国に適用しようとする（例えば旧ユーゴへの介入）欧米列強の姿勢への懐疑が基底にあり、それに対して、ナショナリズムの様々な形態を描き出すことによって個々の文脈でナショナリズムをリベラルな方向に運ぶ方策の第一歩を築こうとするものである。タラスにおける、ナショナリズムがリベラルであるか反リベラルであるかの基準は、前者が個人の権利や差異の尊重、差別の禁止を前提とするのに対し、後者はある1つの集団が他の集団に対して優越し、覇権を握る企図を持ったものを指し、緩やかにはタミールの基準と一致しているが、タラスはこれ以上は踏み込んでいない。2著を比較すると、一見して、（規範論と事例研究という違いはあるが）明らかにタミールの著の方が理論的に整理されて一貫性があり、主張が明らかであるのに対して、タラスの著は、曖昧で最終章の短い理論的な考察も今ひとつ煮え切らない。しかし、意図しているかは別にして、タラスのこの著し方こそが本書の結論であるとも読める。

ナショナリズムは、タミールのように規範として流通しているものを除くと、基本的には便宜上の呼称ないし分析概念である。タラスも、汎イスラーム主義もナショナリズムとして論じ

るなど、ナショナリズムを緩やかに、自らが想い描く郷土（home）を希求するものとして捉えている。そして、タラスはタミールにはほとんど言及していないが、少なくとも、タミールとは違った地点を出発しており、「ナショナリズム研究は、西洋と非西洋の価値体系の闘争の場となっている」と序章で明記している(Taras [2002: xv])。

初めの2章で、歴史上の個々のナショナリズムの多様な道程やネーション概念の多様性を概観した後、ナショナリズムがどのように郷土を描いているかによる分類に従って、帝国を郷土として描くロシアとインドのナショナリズム、郷土を既存の国家よりも小さい領域に想像する分離主義の事例として南アのズールー人とカナダのケベック、単一民族の郷土を希求するナショナリズムの事例としてドイツとイスラエルの右派ナショナリズム、最後に、トランスナショナルに郷土を描く汎ナショナリズムとして、ウンマ概念を基にしたイスラーム主義とラテン・アメリカの反米的な汎アメリカ主義が取り上げられる。こうした事例研究からは、例えば次のようなことが指摘される。郷土を大きく描く場合（帝国・汎ナショナリズム）でも狭く描く場合（分離主義、単一民族主義）でも反リベラルになりうるし（つまりタミールのようにネーションの影響範囲を自制すればよいという問題ではないのである）、例えばロシア・ナショナリズムにおいては、様々な要素を含む帝国としてしか郷土を描けず、それを解体しようとするのはナショナリズムの核心を刺激してしまう。しかしその枠組みの中で個々の民族的集団に権利を与えていく方向でこうしたナショナリズムをリベラルなものにすることができるといい、ソ連からの移行はこの好ましい方向にあるのだという。インドでは、西洋の期待に応えるべく、見かけ上リベラルで世俗的なナショナリズムの普及を図ったところ、逆にヒンドゥー教徒から

も非ヒンドゥー教徒からも不満が噴出し、問題がより複雑化した。グローバル化の勢力が強い今日にあってそれと競合する汎ナショナリズムに国境を破壊する力はない以上、危険視する必要はない、等である。

おそらく適切に提示されている各々の事例に対するタラスの分析は今ひとつ物足りなさが残るし、多文化主義論で知られるW・キムリッカが本書の書評の概括で指摘するように、どのようにこれらのナショナリズムのリベラル化が可能なのかについての分析はかなり不十分であり、どの段階でリベラルだと言えるのかについてはほとんど言及がなく本書には多くの限界がある(Kymlika [2003: 200-1])。だが、西欧的なリベラリズムの原則を堅持しているキムリッカ(cf. 盛山[2006: 268-74])が拾えていないのは、そもそも、様々なナショナリズムに対して杓子定規に何らかのナショナリズム規範で対応することは、集合性の観念そのものが多様であることに無頓着に過ぎること、むしろそうした多様性そのものを議論の出発点にすべきであることを実証的に提示したものとしての本書の意義である。タラスが提示したようなナショナリズムの様々な形態と文脈を無視して、自らの理念(市民的ナショナリズム)からの遠近でリベラル・反リベラルのレッテルを貼る欧米列強の態度こ

そ最も反リベラルなものとしてタラスは批判するのである(Taras [2002: Ch. 7])。

実のところ、現実に流通しているリベラリズムそのものに、機能的に等価な自律した単位を基礎とした「平坦な平面」を前提とする傾向があるように思われる。この単位をネーションとした場合、リベラル・ナショナリズムが容易に完成する。逆に、コサックの存在を既存のリベラリズムで処理することは困難である。タミールが提示したリベラリズムとナショナリズムの理念的な整合の鮮やかさと、詳細な事例研究を経たタラスの理論的な未熟さは、こうした容易さと困難さの必然的結果であるとも言える。タミールが提示したのは、そもそも既存のリベラリズムとナショナリズムは親和的だということであり、他方、リベラリズムそのものについては特に議論していないタラスの書の煮え切れなさが含意しているのは、さらに踏み込んで、この親和関係が成り立っている「平坦な平面」そのものを再考していく必要があるということである。

*本稿は、文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

註

1. 本書の日本語での概観としては、押村[2002]を参照されたい。
2. よりリベラリズム内在的に、リベラリズムが現実的に中立的ではありえないことを詳細に論じたものとしては、盛山[2006: 第8、9章]を参照。
3. Cf. Gans [2007]. 建国当時のシオニストは、単にナイーブにパレスチナに対する「歴史的権利」を主張していたのではなく、こうした認識枠の下での内省を踏まえ、総合的に道徳的確信を補強していた。

文献

Gans, Chaim (2007) "Is There a Historical Right to the Land of Israel?" *Azure*, Winter 5767/2007: 80-111.

- Kohn, Hans (1944) *The Idea of Nationalism: A Study in Its Origins and Background*, New York: Macmillan.
- Kymlicka, Will (2003) "Book Review: *Liberal and Illiberal Nationalisms*," *Democratization*, 10(3): 199-201.
- 大澤真幸 (2007) 『ナショナリズムの由来』 講談社.
- 押村高 (2002) 「エイアル・タミール『リベラル・ナショナリズム』」 大澤真幸(編)『ナショナリズム論の名著50』 平凡社, 440-9.
- 盛山和夫 (2006) 『リベラリズムとは何か：ロールズと正義の論理』 勁草書房.
- Skinner, Barbara (1994) "Identity Formation in the Russian Cossack Revival," *Europe-Asia Studies*, 46(6).
- Smith, Anthony D. (1991) *National Identity*, London: Penguin Books. =(1998) 高柳先男(訳)『ナショナリズムの生命力』 晶文社.
- Tamir, Yael (1993) *Liberal Nationalism*, Princeton: Princeton UP. =(2006) 押村高他(訳)『リベラルなナショナリズムとは』 夏目書房.
- Taras, Ray (2002) *Liberal and Illiberal Nationalisms*, New York: Palgrave Macmillan.
- 植田樹 (2000) 『コサックのロシア：戦う民族主義の先兵』 中央公論新社.